（2）全申請課題が一覧できるのは便利だが、1、2、3年目の課題の区別がわかりにくい。

（3）評価票画面で、評価終了後に右下の「確認」ボタンを押した時に出るエラーメッセージがわかりにくい（認識しにくい）。

（4）　年度別課題一覧表示画面の評価対象課題の背景が緑で、評価対象外課題の背景が白なのは、混同しやすい。（逆の色、もしくは、評価対象課題の背景が明るい色で、評価対象外課題の背景が暗い色の方が良い。）

（5）　評価途中に「アーカイブへ」を押しても反応しない。

（今年度はアーカイブがないためと考えられるが、エラーメッセージがあっても良いのではないか）

（6）　評価票画面の「総計」欄が、点数が表示されると2行表示になってしまう。

表2　システム改善要求と対応

項番	資源	改善要求(要約)	対応	対応
1	評価課題一覧画面	未評価・評価済みの区別を付ける	No.の次の列にステータス列を追加。ステータス:「未評価」「一時評価」「評価済み」	修正
2		評価点(総合点)を表示する。	右端に評価点(総合点)を表示する。	修正
3		評価対象課題と対象外課題の背景色を逆にする。(分り難い為)	評価対象課題と対象外課題の背景色を逆にする。	修正
4		全申請表示の時、一年目・二年目・三年目の区分を付ける	年度の項目列を追加する。	修正
5		件数表示を母数:未評価件数:一時評価件数:評価済み件数に分ける	件数表示を母数:未評価件数:一時評価件数:評価済み件数に分ける	次年度
6	評価入力画面	縦スクロールバーがブラウザとPDFビューアーで2つ表示され不便、解消出来ないか	画面デザインを一新する。(PDF表示を別画面で表示する)	次年度
6		評価途中で「ログアウト」を押すと何のメッセージもなく終了してします、保存されない旨のメッセージ表示が必要。	項番1に関連して一時保存機能を新規追加する。 「一時保存」と「確定」にボタンを分ける。	修正
7		メニューバーから他年度に遷移出来ないか	メニューバーを一覧と同様にする	次年度
8		PDFファイル表示交付申請PDFが良いか成果概要PDFが良いか	−	
9		評価指針(基準)画面を表示する。	メニューバーにリンクを張る。	次年度
10		「研究内容の論理性」チェックで「検討を要する」にチェックしてもコメント入力のエラーメッセージが表示されない 「検討を要する」の場合、「倫理性について検討を要する場合、その理由等」欄が入力必須 評価点1」の場合、「疑問点、改善すべき点その他助言等」欄が入力必須 評価点10」の場合、「評価できる点、推進すべき点」欄が入力必須	チェック仕様を左記の通りにする。	次年度
11		エラーメッセージが分り難い(表示場所)	エラーメッセージをポップアップにするか分りやすい場所に表示する。	次年度
12		「アーカイブ」をクリックしても反応がない	機能が無いので削除する	修正
13		評価点総計が二段表示になる	使用ブラウザに依存、IEでは一行で表示。	次年度

参考資料１　中間・事後評価委員による予備評価（評価委員会開催前の予備評価）手順

本手順は、筆者らが試行的に、紙面による予備評価を行い、その手順を記述したもの。

＜資料の入手＞

・ 中間・事後評価委員会委員は、研究事務局（事務受託者）より評価用資料（研究課題一覧、交付申請書、成果概要、評価方針・評価方法、研究評価票）を受け取る。

＜全体の把握＞

・ 中間・事後評価委員会委員は、研究課題一覧を読み、研究課題全体を把握する。
・ 成果概要、交付申請書を流し読みし、研究課題全体を把握する。
・ 評価方針・評価方法、評価票を見て、評価方法を確認する。
・上記を通じて、およその作業量を推計する。

＜個々の課題の評価＞

１．　評価対象年度の選択
・ 評価を行おうとする対象年度を決定する。
    ➢ 評価者により、どの年度から開始するか異なると推測される

２．個々の研究内容の把握
・ 個々の成果概要、（＋交付申請書）を読み、研究内容を把握する。
    ➢ 課題名、研究代表者の所属・氏名を確認する
    ➢ 研究目的、研究内容、研究成果を読み、研究の内容を把握する
    ➢ 必要に応じて、研究費総額、研究分担者、研究業績を見る
    ➢ ２年目、３年目の研究については、昨年度までの研究と今年度の研究を比較し、今年度分の進捗状況、研究成果を確認する

３．個々の研究の評価（評価票への記入）
・評価を行い、研究評価票に評価結果を記載する。
    ➢ 評価項目に応じて、成果概要、交付申請書の該当部分を確認する

- ➢ 評価が難しい場合は、他の課題の内容や評価結果と見比べる。
  - ✧ 場合によっては、別年度の課題と比較することもある。
- ➢ 評価が難しい場合は、保留とし、次の課題を評価する。

＜評価の見直し＞

・ すべての課題の評価が終わったか確認する。

・ 評価結果が適切か、全体のバランスが取れているか、評価漏れがないか等確認する。

＜別年度の評価の実施＞

・別の年度の課題も同様に評価を行う。

＜評価資料の返却＞

・ 評価委員会事務局に評価資料一式を返送する。

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服緊急対策研究事業）

分担研究報告書

研究発表方法に関する要望調査

研究代表者　桐生　康生　　国立感染症研究所　企画調整主幹

研究要旨　中間・事後評価委員会前に行われる研究発表会における研究発表方法に関する要望について研究代表者に質問紙調査を行った。その結果を踏まえて、研究発表方法を改善した。

背景および目的

研究の評価を行う上で、その研究内容の発表を聴くことは重要である。肝炎等克服緊急対策研究事業では、本研究班を活用し、中間・事後評価委員会前に各研究代表者による研究発表会が、また、事前評価委員会前に課題応募者によるヒアリングがそれぞれ行われている。それらの研究発表会、ヒアリングでは、それぞれの発表者が、プレゼンテーション・ソフトを利用した発表を行っている。

2009（平成 21）年度の研究発表会およびヒアリングでは、事務局のコンピュータのインストールした Microsoft 社製 Windows 版 PowerPoint 2007 を利用して、事務局スタッフがコンピュータを操作して発表が行われた。昨今のコンピュータ環境の多様化していることを踏まえ、発表者が少しでも快適に発表できるよう改善することを目的として、研究成果発表会の発表者を対象に、プレゼンテーション方法に関する要望調査を行った。具体的には、利用を希望するプレゼンテーションのハードとソフト、コンピュータの操作方法について質問を行った。また、調査結果を踏まえて、研究発表会およびヒアリングの発表方法の改善を図った。

方法

研究デザイン

記述疫学・断面調査（電子メールによる自記式質問紙調査）

対象

対象は、2010（平成 22）年度肝炎等克服緊急対策研究事業の研究発表会対象者（研究２年目、３年目の研究代表者）31 名である。

質問紙調査の方法

電子メールによる質問紙調査を行った。質問紙調査票は、自記式であり、記名式で行った。2010 年 11 月 18 日に質問紙調査票を電子メールで送信し、11 月 24 日を回答期限とした。

質問項目

利用を希望するプレゼンテーションのコンピュータとソフト、使用するコンピュータは発表者自身のコンピュータを使用希望するか、事務局のコンピュータを使用希望するか、コンピュータの操作方法は自分で行うことを希望するか、事務局スタッフが行うことを希望するかを質問した(参考資料1)。

結果および結果

回答者数・回答率

回答者数は31名(回答率100%)であった。

母集団

本調査対象者は、肝炎等克服緊急対策研究事業の研究代表者である。全員が日本人男性であった。年齢構成については、プライバシー保護に比し、調査の必要性に乏しいと考え、調査を行っていないが、研究代表者であることから、40 歳未満の研究者を対象としている若手研究枠の研究代表者3名を除けば、40歳代から60歳代前半の者がほとんどを占めると考えられる。バイオ・サイエンス研究を行っている大学や国立感染症研究所などの研究機関の医師、研究者であり、役職は、教授や部長などの部門長やそれに次ぐ者がほとんどである。

利用希望するプレゼンテーション・ソフト

利用を希望するプレゼンテーション・ソフト(質問1)は、Windows 版 PowerPoint が 22 名(71%)、Macintosh 版 PowerPoint が 6 名(19%)、Macintosh 版 Keynote が3名(10%)であった(表1、図1)。OpenOffice.org, NeoOffice, LibreOffice などの OpenOffice.org 系のソフトの利用希望者はいなかった。

コンピュータ基本ソフト(Operating system; OS)別では、71%が Windows で1番多く、次いで Macintosh の 29%だった。Linux や FreeBSD などの Unix 系 OS を希望する者はいなかった。また、iOS (iPad)や Android など、非 Windows 系タブレット・コンピュータ OS の利用を希望する者はいなかった。

バイアスの検討

回答者の機微な情報や行動に関する質問には、バイアス(特に、underreporting error)が生じやすいとされている。本調査の質問内容は機微な情報や行動ではないと考えられ、このバイアスは少ないと考えられる。本調査を行った理由の1つは、筆者がこの問題に強い関心を持っているためでもある。筆者も調査対象者になっており、筆者の回答である Macintosh 版 Keynote も含まれている。このことが Macintosh について過大評価(overreporting)されている可能

性を考慮し、これを除いた 30 名で再集計すると、OS 別で Windows が 22 名(73%)、Macintosh が8名(27%)となる。

使用するコンピュータとその操作

使用するコンピュータ(質問2)は、自分のコンピュータを使用希望する者が 11 名(39%)、事務局のコンピュータを使用希望する者が 8 名(29%)であった(表2)。コンピュータの操作者(質問3)については、自分で操作を希望する者が 23 名(85%)と大部分を占めた(表3)。

本調査を受けての研究成果発表会、ヒアリングの改善

2009(平成 21)年度までの研究成果発表会およびヒアリングでは、事務局のコンピュータにインストールした Microsoft 社製 Windows 版 PowerPoint を利用していたが、本調査を受けて、Windows 版 PowerPoint に加えて、Macintosh 版 PowerPoint、Macintosh 版 Keynote も使えるようにした。技術的には、Apple 製 MacBook 上の MacOS X 上で Macintosh 版 PowerPoint と Keynote を利用するとともに、MacOS X 上に仮想化ソフト VM Ware Fusion をインストールし、その上で Windows を走らせ、更にその上で Windows 版 PowerPoint が動作するようにした(図2)。VMWare Fusion, Windows XP 上の PowerPoint 2010 で、図形の背景の一部が黒くなるトラブルが見られたが、Macintosh 版 PowerPoint 2011 上で問題なく表示できた。この原因が VMWare Fusion によるかどうかの特定はできなかった。

また、昨年度までは事務局がコンピュータを操作して発表が行われてきたが、今年度は、発表者の希望に合わせて、発表者自身でも事務局スタッフでも操作できるようにした。

操作するコンピュータについては、発表者自身のコンピュータの使用を希望する者が半数近くを占めていたが、今年度も従来通り、事務局の用意したコンピュータのみを使用することとした。発表者自身のコンピュータを使用する場合、時間が限られている発表会の中でコンピュータの交換を短時間に行うことが困難だったこともあるが、評価の公平性を考え、プレゼンテーション・ファイルの提出期限を揃える必要があると考えたためである(自分のコンピュータを使用する場合は、発表当日までプレゼンテーション・ファイルの作成・修正が可能となってしまう)。

プレゼンテーション・ソフトおよび OS について

本調査では、研究代表者の約3割が Macintosh の利用を希望していた。日本における Macintosh のシェアは 10%に満たないと推計されていることから、本調査対象集団における Macintosh 利用割合は一般日本人より高いと考えられた。これらの少数者の要望をどこまで受け入れるかは、事務局の能力やコストなど

に依存している。筆者は、Windows が特定の企業の規格であることから、公的な場において Windows の使用を強いるのは望ましいことではないと考え、Macintosh の利用も可能となるように努力した。しかし、Macintosh にしても特定の企業のものであり、利用の選択肢が増えたとはいえ、理想的ではない。

プレゼンテーション・ファイルの主な国際標準規格には、OpenDocument Format (ODF)と Office Open eXtensible Markup Language (OOXML)がある。OpenOffice.orgなどで使われているODFは普及しているとは言い難く、また、様々なソフト間でレイアウトが保たれているかどうか等、ソフト間の互換性の確認が不十分である。OOXML については、Windows および Macintosh 版の PowerPoint の新しいファイル形式(.pptx)がサポートしているが、transitional 規格(conformance class)のサポートが主であり、本格的な規格である strict 規格のサポートは不十分である。今後、ODF および OOXML の strict 規格の普及と互換性向上が進めば、より公平な環境での研究発表が可能になると考えられる。

1) Lu Ann Aday. Designing and Conducting Health Surveys. Jossey-BassPublishers (1991)

2) Seymour Sudman, Norman M. Bradburn. Asking Questions: A Practical Guide to Questionnaire Design. Jossey-BassPublishers (1982)

3) ウインドウズ7、XPと比較で約8割「満足」(YOMIURI ONLINE, 2011 年 2 月 1 日)
http://www.yomiuri.co.jp/net/news/internetcom/20110201-OYT8T00239.htm

4) ODF (ISO/IEC 26300:2006)
http://www.iso.org/iso/iso_catalogue/catalogue_tc/catalogue_detail.htm?csnumber=43485

5) OOXML (ISO/IEC 29500:2008)
http://www.iso.org/iso/pressrelease.htm?refid=Ref1181

表1　利用希望プレゼンテーション・ソフト（質問1）

ソフトの種類・バージョン		人数	%
Wndows版PowerPoint		22	71
	2010	1	3
	2007	12	39
	2003	9	29
Windows版OpenOffice.org 3		0	0
Mac版PowerPoint		6	19
	2011	1	3
	2008	4	13
	2004	1	3
Mac版Keynote 09		3	10
Mac版OpenOffice.org/NeoOffice 3		0	0
Linux版OpenOffice.org 3		0	0
その他		0	0
合計		**31**	**100**

図1　利用希望ソフト

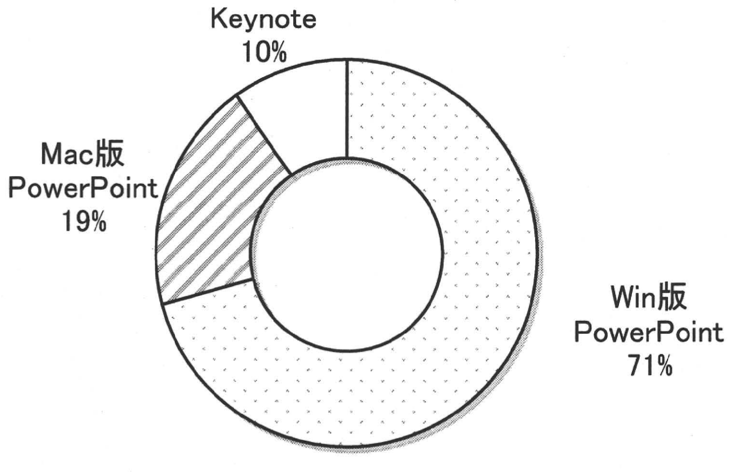


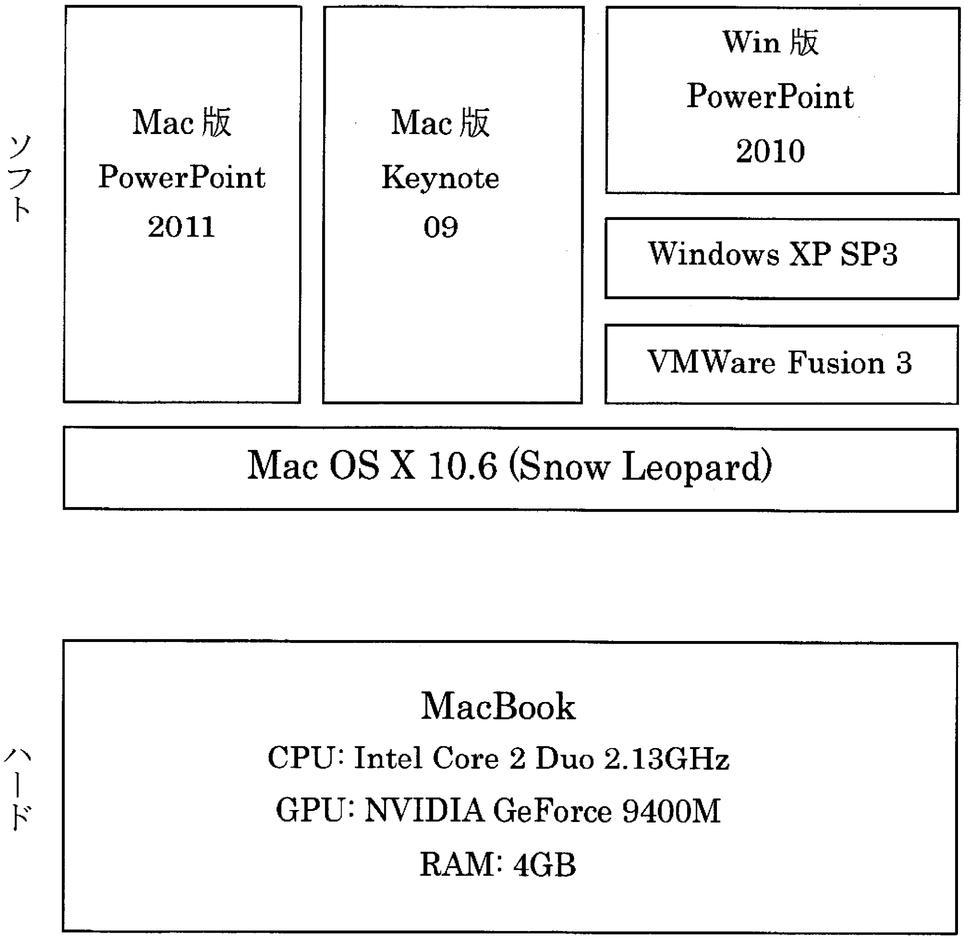
表2　使用パソコン（質問2）

使用パソコン	人数	%
可能なら自分のコンピュータを使用	11	39
可能なら事務局のコンピュータを使用	8	29
どちらでも良い	9	32
合計	28	100

表3　コンピュータ操作者（質問3）

コンピュータ操作者	人数	%
可能なら自分で操作したい	23	85
可能なら事務局で操作してほしい	1	4
どちらでも良い	3	11
合計	27	100

図２　プレゼンテーション用コンピュータ構成



注：肝炎等克服緊急対策研究事業における平成 22(2010)年度研究発表会および平成 23(2011)年度ヒアリングで使用したコンピュータの構成

参考資料１　「研究発表に関する要望調査」質問紙調査票

「肝炎等克服緊急対策研究事業」研究代表者(2、３年目）各位

日頃より、当研究事業の円滑な実施にご理解とご協力をありがとうございます。

平成23年1月25日開催予定の研究成果発表会については、
プロジェクターによる口頭発表10分以内・質疑応答約３分で、
資料は16枚を上限とするプレゼン資料(PowerPointなど)を予定していますが、
少しでも発表しやすい環境の整備のためどのようなコンピュータ環境で行うべきか検討を行っているところです。

そのため、研究代表者の皆様がどのようなコンピュータ環境での発表を希望しているかを調べさせていただく次第です。

つきましては、以下の質問にご回答いただきますようお願いします。
発表当日の時間的制約や事務局の対応に限りがありますので、
必ずしも皆様の要望を満たせるわけではありませんが、努力したいと思いますので、ご協力お願いします。

ご多忙中恐縮ですが、１１月２４日（水）正午までに、
○○宛にメール（この差出人アドレスにご返信下さい）でご回答お願いします。

なお、個人情報の取り扱いについては十分に注意し、
いただいた回答は、統計的に集計・処理を行い、個々人の結果を外部に公表することはありません。

※発表資料提出期限は、平成23年1月20日前後を予定しております。
　ご協力頂きましたアンケートの結果も踏まえ、詳細については、12月上旬までにご連絡致します。

今後とも宜しくお願い致します。

2010(平成22)年11月18日
「肝炎等の早期克服のための総合的推進に関する総括研究」
研究代表者　桐生康生（代　〇〇）

…
…*…*…*…*…*…*…*

質問1　研究成果発表会の発表でご自分の好きなソフトが利用できるとしたら、どのようなソフトを利用したいですか。
　　次の中から選び、（　）内に〇をお付けください。

（　）Windows 版 PowerPoint 2010 (13)
（　）Windows 版 PowerPoint 2007 (12)
（　）Windows 版 PowerPoint 2003 (11)
（　）Windows 版 OpenOffice.org 3
（　）Macintosh 版 PowerPoint 2011
（　）Macintosh 版 PowerPoint 2008
（　）Macintosh 版 PowerPoint 2004
（　）Macintosh 版 Keynote ’09 (5.0)
（　）Macintosh 版 OpenOffice.org / NeoOffice 3
（　）Linux 版 OpenOffice.org 3
（　）その他（　　　　　　　　　　　　　　　　）

質問2　事務局ではWindows版PowerPoint 2007または2010を用意する予定です。
　　研究成果発表会の発表で使用するコンピュータは、
　　ご自分のコンピュータと事務局のコンピュータのどちらを使用したいですか。
　　次の中から選び、（　）内に〇をお付けください。

（　）可能なら自分のコンピュータを使用したい
（　）可能なら事務局のコンピュータを使用したい
（　）どちらでも良い
（　）その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

質問３　研究成果発表会でのコンピュータの操作は、どのような方法を希望しますか。

次の中から選び、（　）内に○をお付けください。

（　）可能なら自分で操作をしたい
（　）可能なら事務局で操作をしてほしい
（　）どちらでも良い
（　）その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

質問４　その他、研究成果発表会に関してご意見やご要望がございましたら、ご指摘ください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

ご協力ありがとうございました。

201030039A (DVD-R有り) 2/2

厚生労働科学研究費補助金　肝炎等克服緊急対策研究事業
肝炎等の早期克服のための総合的推進に関する総括研究
平成２２年度　総括・分担研究報告書（別添）

平成２２年度厚生労働科学研究費補助金

肝炎等克服緊急対策研究事業

研究成果の概要

研究代表者　桐 生 康 生

平成 23(2011)年 3 月

厚生労働科学研究費補助金　肝炎等克服緊急対策研究事業
「肝炎等の早期克服のための総合的推進に関する総括研究」
研究代表者：桐生康生（国立感染症研究所 企画調整主幹）
平成２２年度　総括・分担研究報告書（別添）
「研究成果の概要」

平成２２年度厚生労働科学研究費補助金　肝炎等克服緊急対策研究事業の研究課題に関して、平成２３年１月２５日に開催された研究発表会及び中間・事後評価委員会資料（成果概要及びプレゼンテーション資料）をまとめた資料。

平成22年度　肝炎等克服緊急対策研究事業　研究成果概要

目次

		開始年度	終了年度		頁
（1年目）					
三田　英治	B型慢性肝炎に対する新規逆転写酵素阻害剤テノホビルの有効性・安全性に関する検討	22	24	・・・	1
熊田　博光	ウイルス性肝炎における最新の治療法の標準化を目指す研究	22	24	・・・	9
金子　周一	ウイルス性肝疾患に対する分子標的治療創薬に関する研究	22	24	・・・	21
林　紀夫	ウイルス性肝炎からの発がん及び肝がん再発の抑制に関する研究	22	24	・・・	31
田中　靖人	ウイルス性肝炎に対する応答性を規定する宿主因子も含めた情報のデータベース構築・治療応用に関する研究	22	24	・・・	37
榎本　信幸	ウイルス性肝炎の病態に応じたウイルス側因子の解明と治療応用	22	24	・・・	45
脇田　隆字	肝炎ウイルス感染複製増殖過程の解明と新規治療法開発に関する研究	22	24	・・・	49
下遠野邦忠	肝炎ウイルスによる肝疾患発症の宿主要因と発症予防に関する研究	22	24	・・・	55
大段　秀樹	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	22	24	・・・	63
松浦　善治	肝炎ウイルス感染における自然免疫応答の解析と新たな治療標的の探索に関する研究	22	24	・・・	73
小原　道法	ウイルス性肝炎に対する治療ワクチンの開発に関する研究	22	24	・・・	79
田中　純子	肝炎ウイルス感染状況・長期経過と予後調査及び治療導入対策に関する研究	22	24	・・・	87
櫻井　文教	アデノウイルスベクターを利用したC型肝炎治療薬創製基盤技術の開発	22	24	・・・	95
鈴木　淳史	肝炎による肝未分化細胞の発生とその発癌への影響に関する研究	22	23	・・・	101
玉井　恵一	小胞輸送ESCRT経路を利用したC型肝炎ウイルス排除	22	24	・・・	105
政木　隆博	C型肝炎ウイルスの非構造蛋白5Aを標的とした新規治療法の開発に関する研究	22	24	・・・	111
吉岡　靖雄	画期的C型肝炎ウイルス阻害療法の確立を目指した核酸医薬送達ナノシステムの開発	22	24	・・・	121
（2年目）					
田中　榮司	B型肝炎の核酸アナログ薬治療における治療中止基準の作成と治療中止を目指したインターフェロン治療の有用性に関する研究	21	23	・・・	129
持田　智	免疫抑制薬、抗悪性腫瘍薬によるB型肝炎ウイルス再活性化の実態解明と対策法の確立	21	23	・・・	155
溝上　雅史	B型肝炎のジェノタイプA型感染の慢性化など本邦における実態とその予防に関する研究	21	23	・・・	167
鈴木　文孝	C型肝炎における新規治療法に関する研究	21	23	・・・	177
竹原　徹郎	C型肝炎難治症例の病態解明と抗ウイルス治療に関する研究	21	23	・・・	189
澤本　和延	慢性C型肝炎のインターフェロン療法における幹細胞機能の変化とうつ病発症に関する基礎・臨床連携研究	21	23	・・・	199
西口　修平	血小板低値例へのインターフェロン治療法の確立を目指した基礎および臨床的研究	21	23	・・・	217
池田　一雄	日本人の細胞に由来するiPS細胞からの誘導ヒト肝細胞を用いたキメラマウス肝炎モデル開発とその前臨床応用	21	23	・・・	235
堀田　博	肝炎ウイルスによる発がん機構の解明に関する研究	21	23	・・・	247

小池　和彦	肝炎ウイルスと代謝・免疫系の相互作用に関する包括的研究	21	23	・・・ 257
岡本　宏明 (H22.2～変更)	経口感染する肝炎ウイルス（A 型・E 型）の感染防止、遺伝的多様性および治療に関する研究	21	23	・・・ 271
正木　尚彦	肝炎に関する全国規模のデータベース構築に関する研究	21	23	・・・ 295
森島　恒雄	B 型肝炎の母子感染および水平感染の把握とワクチン戦略の再構築に関する研究	21	23	・・・ 305
坂井田　功	骨髄および脂肪由来細胞を用いた次世代型肝臓再生・修復（抗線維化）療法の開発研究	21	23	・・・ 313
本多　政夫	肝がんの新規治療法に関する研究	21	23	・・・ 331
阿部　康弘	膜蛋白質発現系を利用した C 型肝炎ウイルス感染受容体の生化学的・疫学的解析及び感染阻害剤の開発	21	23	・・・ 343
（終　了）				
有井　滋樹	肝癌早期発見を目的とした分子マーカーおよび画像診断システムの開発	20	22	・・・ 353
中面　哲也	癌胎児性抗原を利用した肝がんの超早期診断法と発症予防ワクチンの開発	20	22	・・・ 367
河田　則文	インターフェロンの抗肝線維化分子機構の解明とその応用	20	22	・・・ 381
佐田　通夫	肝炎・肝硬変に対する抗ウイルス剤以外の治療法に関する研究	20	22	・・・ 393
鈴木　一幸	肝発癌抑制を視野に入れた肝硬変の栄養療法のガイドライン作成を目指した総合的研究	20	22	・・・ 405
泉　　並木	データマイニング手法を用いた効果的な C 型肝炎治療法に関する研究	20	22	・・・ 419
八橋　　弘	データマイニング手法を用いた効果的な治療方法に関する研究	20	22	・・・ 431
岡上　　武	非アルコール性脂肪性肝疾患の病態解明と診断法、治療法の開発に関する研究	20	22	・・・ 443
茶山　一彰	ヒト肝細胞キメラマウスを用いた治療抵抗性の肝炎に関する研究	20	22	・・・ 471
石井　孝司	肝炎ウイルスワクチン実用化のための基礎的研究	20	22	・・・ 479
鈴木　哲朗	C 型肝炎ウイルスキャリア成立の分子基盤と新規治療薬開発のための基礎的研究	20	22	・・・ 489
磯田　勝広	Claudin-1 を標的とした C 型肝炎ウイルス感染阻害法の開発とその臨床応用に向けた疫学調査	20	22	・・・ 497
井出　博生	肝炎の予防および治療対策に関する費用対効果分析	20	22	・・・ 505
楠本　　茂	リツキシマブ＋ステロイド併用悪性リンパ腫治療中の B 型肝炎ウイルス再活性化への対策に関する研究	20	22	・・・ 515
桐生　康生 (H22.8～変更)	肝炎等の早期克服のための総合的推進に関する総括研究	20	22	・・・ 527

1年目研究課題